

# 自然環境における「こわい」体験が子どもの危険回避意識に及ぼす影響

## —木更津社会館保育園を事例として—

千葉大学大学院自然科学研究科環境計画学専攻

修士2年 森下智子

### 1. 研究の背景と目的

ここ最近子どもが被害にあう不慮の事故が増えてきており、子どもの安全を守ることが叫ばれている中で、子どもたち自身の危険回避能力を高めることが必要であると考えられます。しかし、子どもの「こわい」という感情は、本やテレビの中で間接的に伝えられることが多くなり、実際の身の回りの環境から体験することが少なくなってきました。よって、昔は日常生活で身につけることができた危険回避能力を、現在は自然体験を活用し、身につけられる可能性があると考えられます。そこで本研究では、自然環境における「こわい」体験の実態を把握し、子どもにとって「こわい」という感情を刺激することが危険回避意識の形成にどう影響するのか、その手段としてなぜ自然体験が有効なのかを検証することを目的とします。

### 2. 研究方法

#### (1) 研究対象

##### ①木更津社会館保育園及び小学生対象「土曜学校」

千葉県木更津市で森の保育を実施している保育園で、保育園設置法人所有の請西の森 6600m<sup>2</sup>を中核に森における園外保育を行っており、森の保育の延長として卒園生(小学生)を対象に隔週土曜日に「土曜学校」を運営しています(図1)。

##### ②A小学校

千葉県千葉市にある東京湾を埋め立てたニュータウン内の小学校で、公園や校庭などの周辺の自然環境が計画的に配置されています(図1)。



図1 研究対象地の位置

#### (2) 調査方法

昔は日常生活で身につけることができた危険回避能力を、現在自然体験の中でどのように身につけているのかを把握するために、「森の保育」を行っている木更津社会館保育園及び「土曜学校」の子どもたちと、都市のA小学校の子どもたちを対象に調査を行いました(表1)。

表1 調査方法

調査目的	対象	調査名	調査内容
子どもの感じる「こわい」空間の実態調査	小学1年生~4年生 (木更津「土曜学校」54人とA小学校59人)	質問紙調査	「こわい」空間の構造、「こわい」という情報の認識理由、再度「こわい」場所に出会った時の反応、自然の中でのけがの有無等
		絵図調査	「自分の身近なこわい空間」の指定した長方形への自由記述 (3・4年生:5×12cmの長方形 / 1・2年生:10×20cmの長方形)
「こわい」体験の状況把握と、危険回避における行動観察	幼稚園年長組 (木更津社会館保育園41人)	行動観察調査	ビデオを用いた遊び、けが、けんかの発生とその対処における行動観察

#### (3) 分析基準

分析基準として調査を通じて確認された「こわい」体験レベルを、けがが発生した際の対応により、次ように3つに分類し分析を行いました。危険度小が当事者の子どもたちだけで解決でき



るもの、危険度中が仲間や大人により解決できるもの、危険度大を病院にいき医師の処方により解決できるものとなりました。

### 3. 結果と考察

#### ①「こわい」体験の体験差

自分で体験した「こわい」空間に再度行きたいかについてアンケートを行った結果、A小では「絶対行きたくない」「あまり行きたくない」が多くみられましたが、木更津では「絶対行きたくない」「あまり行きたくない」と「行きたい」「近寄りたいたい」に分かれました(図2)。

さらに自然の中でのけがの危険度を合わせて分析すると、A小では危険度レベルに拘らず、行きたくない傾向がみられました。一方木更津では、けがの背景に木登り、工作、探検などの楽しい体験をしている子どもは、危険度レベルに拘らず行きたい傾向を示すことが確認されました(表2)。

以上のことより、木更津の様に自然の中での「こわい」体験の背景に楽しい体験があると「こわい」空間に再度行きたいと思うと推察されました。

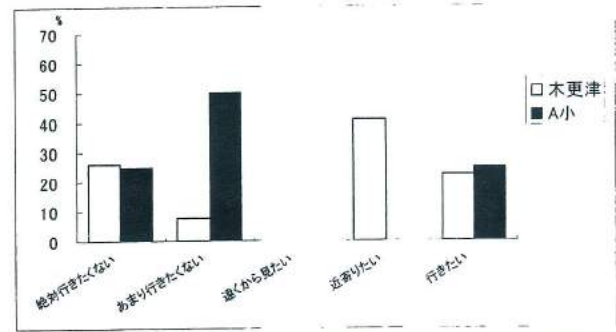


図2 自分で体験した「こわい」空間に再度行きたいかの割合

表2 自然の中でのけがの危険度と自分で体験した「こわい」空間に再度行きたいかの関係について

危険度	絶対行きたくない・あまり行きたくない		近寄りたいたい・行きたい	
	木更津	A小	木更津	A小
大	スズメバチに刺される 草アレルギー	スズメバチに刺される 海で溺れる	ハチに刺される 海で溺れる	—
中	トゲが刺さる	毛虫によるかぶれ トゲが刺さる	木登りでの落下 探検による迷子	—
小	—	かけっこの転倒	工作中的の切り傷 植物採取中の切り傷	かけっこの転倒

#### ②自己管理能力の育成

「再度自然の中でけがをしないように気をつけること」についてアンケートを行った結果、木更津では主に危害を加える虫や動物に対して帽子を被るなど、それぞれの危険の対象に具体的で積極的な回避をしているのに対し、A小では危険度の大小に拘らず危険を感じる場所には行かないという消極的な回避をしていました(表3)。このことにより、木更津はそれぞれの危険度のレベルに対応してけがをしないように回避を行っているのに対し、A小ではそれぞれの危険度レベルに対処が連動しておらず、危険から遠ざかることで回避を行っていることが確認されました。また行動観察によると、危険度大中小の具体的な「こわい」体験の事例とその後の子どもたちの対処が把握されました(表4)。このように子どもたちはこわい体験を何度も繰り返すことで自己管理能力を育成します。

以上のことより、木更津では危険にあった後の対処方法や回避方法を認識しているため、「こわい」体験に挑戦でき、自己管理能力を育成することができると考えられました。

表3 児童の認識するけが防止のための注意点

学校	危険度	けが防止のための注意点	リスク管理
木更津	大	ハチ回避に帽子を被る ヤマカガシは頭を潰して持つ	積極的回避 対処
	中	毛虫回避には長袖長靴を履く	積極的回避
	小	藪での棘や枯木に注意する	積極的回避
A小	大~小	自然の中で遊ばない 両親のそばを離れない 殺虫剤を持っていく	消極的回避 対処
	中	毛虫から逃げている	消極的回避



表4 自然環境における「こわい」体験の具体的事例

危険度	「こわい」体験の内容	対応	けが	けが発生率
大	沢の上の丸太渡り	個人差有(苦手な子は足が震え四つん這い)	無	0.0%
	滝壺への飛び込み	個人差有(苦手な子は足が震え挑戦できない)	無	
	藪こぎ中自然薯掘りの大穴を発見	先頭の子どもが大きな声をあげて皆に知らせる	無	
	臭いキノコを発見	毒ではないか確かめるために指導者に見せる	無	
中	移動中にわざとがけを降りる	近くの高い草をつかみ上手く降りる	無	58.3%
	自転車でがけから落下	鼻血を出し仲間3人に救出してもらう	有	
	植物を誤飲	仲間が保育士を呼び保育士により対処する	有	
	植物採集中にムカデに刺される	仲間が保育士を呼び保育士により対処する	有	
小	泥遊び中深みにはまり出られなくなる	5分ほど格闘した後草をつかみ足を抜く	無	55.2%
	急な斜面の藪こぎ中に笹で切り擦り傷	痛いと言うがあまり気にしない	有	
	裸足での散策中に足を擦り傷	自分で絆創膏を貼って対処する	有	
	竹工作中に切り傷	自分で血を洗い絆創膏を貼って対処する	有	

### ③観察力の向上

絵図調査の結果、両校で比較的多く描かれた「がけ」「ハチ」について、構成要素まで描かれているものを具体的、描かれていないものを抽象的として分析すると、木更津は具体的な構成要素まで描く絵が多かったのに対し、A小は抽象的で遠景として捉えている絵が多いことがわかりました(表5)。

以上のことより、木更津の子どもたちは視点が対象に近く、描いたものの対象と自分とが感情や体験を通じてより強く認識することができるため、自然体験は観察力を向上させることができると推察されました。

### ④人間関係の構築

行動観察によると、森の保育での遊びは53種類が確認され、その中で「こわい」体験を伴う遊びは全体の43%でした。さらに「こわい」体験を伴う遊びの中で「協力する遊び」は65%と多くを占めていました(図3)。このことから「こわい」体験において、仲間の存在や協力の重要性が推察されました。

また、「こわい」体験を伴う森の保育での遊びは、得意不得意が生じるため、様々なタイプの子どもが活躍する場があることから(表6)、自然環境における「こわい」体験において他人に認められ自信を付けるプロセスの中で、人間関係が構築される側面もあると考えられました。

以上のことより、自然環境における「こわい」体験を伴う遊びでは、協力するものが多く、仲間との関わりが不可欠であるため、人間関係や社会性を養うことができると推察されました。

表5 絵図構成要素と学年別内訳(がけ・ハチ)

構成要素	学年	木更津		A小	
		具体的	抽象的	具体的	抽象的
がけ	低学年	4	3	0	1
	中学年	2	2	2	2
ハチ	低学年	4	0	1	0
	中学年	1	0	1	1

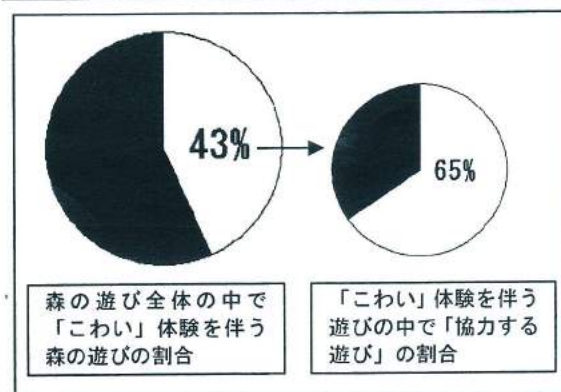


図3 森の遊びにおける「こわい」体験の割合

表6 得意不得意の分かれる森の「こわい」体験とその反応

得意不得意が分かれる「こわい」体験を伴う森の遊び	子どもたちの対応の違い	
	いつも目立つ子の反応	その他の子の反応
滝つぼへの飛び込み	足が震えて飛び込むことができない	いつも目立たない男児が一気に飛び込む
沢の上の丸太渡り	四つん這いになり少し遅い	小柄な男児が手を広げバランスを取り渡る
昼食を泥に落とす	女児が突然のハプニングで泣く	女児が泥なんて平気だと励まし、パンの泥部分を取り、オレンジと一緒に洗いに行く
軍手をしないで芋ほり	擦り傷をして飽きて遊びだす	女児が根気よく掘り続け大きな芋を収穫する